



顔の見えるアートセンター

ひと、もの、こと、がグラデーションに溶け合うプラットフォーム

それぞれの役割が入れ替わるような空間構成

「アートセンターはしもと」では、これまでさまざまなワークショップや一連の活動を通じて、多様なひと、もの、こと、がグラデーションに溶け合うプラットフォームを創造してきたと考えています。こうした活動の軌跡を引き継いで、地域に開かれた「顔の見えるアートセンター」を提案します。

ここでは美大の学生スタッフ（セミプロ）やプロアマを問わない地域のアーティストや職人や子どもたちなど、「アートセンターはしもと」を支える多くの人々があり、**スタッフと来訪者の間にグラデーションな興行きをつ**っていることに注目しました。誰にとってもアートを身近に感じ、理解を深め、芸術との関係を築く上で、プログラムを提供する側と享受する参加者という二分法ではなく、こうした中間的な役割のみなさんが、**ときには技術を教え、ときには教え方を学ぶ**というような**双方向性を持ち、次第に運営にコミットしていくような開かれた可能性を持っている**からです。

一方で、なにかを制作することと制作されたものとの間に、制作するための道具や簡単に制作物を掲示できるような展示インフラの存在がそこかしこに感じられ、いつでも取り出せたり直ぐ側にあることでさまざまな「**参加の仕方**」に障壁がない**ことが、アートを日常に引き寄せていく**ためにはとても重要な要素だと考えています。

したがって、わたしたちの提案では「執務空間」「収納空間」「作業・制作空間」のような諸室の関係や配置を見直し、それぞれが互いに絡み合い、**どちらが地か図かが決まらないような空間構成**となっています。スタッフが展示したり、ワークショップに参加したり、学生が準備したり、**各々が役割をもち、時に立場が入れ替わっていくような、ここに登場するすべての登場人物の顔の見えるアートセンター**です。

可能性を余白として持つVI計画

新しい「アートセンターはしもと」は、いろいろな活動が中に見えたり外に見えたり、従来の表と裏の役割はもっとグラデーションに移行しながら複数の役割の中に創造性が生まれると考えています。このVI・ロゴは、アートと地域、人と人、文化と文化の重なりを余白にこそ「アートセンターはしもと」の可能性を表しています。

